令和6年度新時代の英語教育推進事業

外部講師の先生方による指導・助言

～小学校編～

山形県教育局義務教育課

ご指導いただいた先生方

佐藤　博晴　先生　（山形大学）

小泉　有紀子　先生　（山形大学）

金森　強　先生　（文教大学）

阿野　幸一　先生　（文教大学）

阿部フォード　恵子　先生（CALAグローバル）

酒井　英樹　先生　（信州大学）

太田　洋　先生　（東京家政大学）

向後 秀明 先生（敬愛大学）

　英語教育実践リーダーは、年間を通じて様々な視点から実践へのご指導をいただきました。

　指導・助言の一部をご紹介しますので、先生方もご自身の実践を振り返り、授業改善に役立ててください。

思考の働くやり取りを

・毎時間、機械的な挨拶....。

→ 雨が降っている日に先生が「Oh, it's sunny today!」と言った冗談に、「No! It's snowy today.」としっかり聞いて応答できる。

・相手が何を言っても同じ応答....。

→ 相手が言った内容に応じて、「Why?」や「What ○○ do you like?」など、しっかり聞いてやり取りできる児童を育てたいですね。

良好なコミュニケーション

教科書の対話では、①相手に質問→②相手が答えるという流れもありますが、コミュニケーションを円満にするためには、相手に質問するだけでなく、自分のことを相手に伝えることも大切です。

自分のことを知らせないのに、相手に聞くことは失礼になる場合もありますよ。

英語の発話が苦手な先生へ

とっさに英語が出ない先生は、まずはClassroom Englishを積極的に使ってみてはどうでしょうか。

正しい発音や発話のモデルとしてではなく、多少間違っても積極的に英語を使う姿を示すことにも価値があります。正しい音声は、ALTやICTを効果的に活用していきましょう。

質問の工夫

段階的な質問をすることで、みんなが応答できたり、自分の考えをもったりすることにつながるでしょう。

（例）「将来の夢について」

Do you want to be a teacher?（Yes / Noで答える）

Do you want to be a teacher or a doctor?（選んで答える）

What do you want to be?（具体的な情報を答える）

Ask me!

授業では、教師が質問して児童が答えるという形になりがちです。

→ 教師が「Ask me!」と問いかけるなど、児童から質問を促す

児童同士で質問したりする機会を設ける

などの指導を行いながら、児童が質問することに慣れ、やり取りを継続する力を育みたいですね。

音声での慣れ親しみ

× すぐに「文字」で書く → ○ まずは「音」でたっぷり聞く

意味などの推測を助けるために、身振りを入れたり、実物や写真を見せたりするのもよいでしょう。英語のイントネーションやアクセントに意識を向けることも大切です。

様々な文脈や活動の中でインプットする機会を十分に確保しましょう。

語句や表現について

例えば、「Look at ～.」という表現を学ぶ時、
「Look at me.」「Look at the sky.」などの音声と同時に、顔を動かして実際に見ることで、表現とそのイメージの両方がインプットされていくでしょう。

単語も、「音声」「絵（写真）など」を利用して慣れ親しむことが大切です。

“Big voice!”と言わなくても

例えば、ペア活動で

→ 「横ペア」「縦ペア」に加えて「斜めペア」で会話を行うと、

「斜めペア」での会話は声が重なって聞こえづらくなるため、自然と大きな声で相手に伝えることを意識できるでしょう。

実態に応じて、意図的に仕組んでみましょう。

小学校の「書くこと」

小学校では、

・アルファベットや自分の名前を書くことができる

・語句や表現を書き写したり、例文を見ながら書くことができる

ことで十分です。何も見ないで英文を書くことは求められていません。

まずは音声でたっぷり英語に慣れ親しみましょう。

ふり返りについて

ふり返りを毎時間書くことが目的になっていませんか？

→ ・児童が記入した内容が、次の言語活動で意識されているかを見取る

・ふり返りの内容を踏まえて、次時の導入や指導に生かす

など、ふり返りが次時の学びに向かう児童の姿として表れることが大切です。

中間指導は…

▲ 教師が説明する時間 → ○ 児童が「自己評価」する時間

授業のめあてや言語活動の目的・場面・状況に対して、

・自分の表現はどうだったかなどを児童が考える

・他の児童の表現で良い点を共有する

など、児童が気付いて考える場を充実させましょう。

Fingertip Communication

Fingertip communication

＝ 腕を伸ばしてお互いの指先が触れる距離で会話する

顔をあげて話したり、相手に聞こえる声で話そうとしたりする姿につながります。

聞こえなければ、「Sorry?」など聞き返す姿勢も育みたいですね。

目的が明確になれば…

　言語活動を行う際に、「誰に（と）」「何のために」コミュニケーションを行うのか、児童が意識できていますか？

　コミュニケーションを行う目的や場面、状況などを児童が意識できると、「自分の考えを伝えるために何を言うか」を思考し、「正しく伝えられるように何をすべきか」などの学び方を児童が考え出すでしょう。学び方に気付かせる支援をしながら、価値付けたいですね。

英語使用の正確さ

　多くのことを伝えようとすれば、表現の誤りも増えてきます。
このような時は、すぐに誤りを正すのではなく、児童の表現した「内容」を大切に指導するとよいでしょう。

　「内容」を大切にしながら、コミュニケーションに支障をきたしているか、聞き手に通じているかという視点で、「どう言えば正しく伝わるか」を児童が考えられるように指導を行いましょう。

言い換える力

伝えたい内容があっても、そのままでは語句や表現などが難しくて言えないことがあります。

→ 学んだ語句や表現で表せないかを考える

既習事項を活用して言いたいことを伝える力を育むことにつながります。

「指導・助言　～中学校編～」も、授業改善のヒントになる内容がたくさんあります。

小中接続の観点からも、ぜひ参考にしてください。